

# 沖縄八重山文化研究会会報

第 233 号

発行 沖縄・八重山文化研究会  
事務局 沖縄県立芸術大学付属  
研究所 波照間永吉研究室  
那覇市首里金城町三一六  
Tel. 〇九八―八八―二一五〇四三



第二三三回沖縄・八重山文化研究会は、二〇一二年一〇月一三日、県立芸大付属研究所内で開かれ、大城公男氏（日本民俗学会会員）が「八重山の綱引き儀礼について」と題して発表した。

大城氏は一九三七年竹富町鳩間島生まれ、琉球大学卒業後、高校教諭をつとめ、九八年に定年退職。二〇〇三年東北大学大学院文学研究科前期博士課程修了。二〇〇一年に榕樹書林より『八重山 鳩間島民俗誌』を刊行、同書は翌年日本地名研究所の第三一回風土研究賞を受賞している。

氏はまず、シチは正月であり、一年の農作業の始めでもあったこと、仏教の伝来で七月が仏事の月とされ、シチがずらして行われるようになり、その際、シチの予祝祭がその直前のプールと結合して行われるようになったことなどを説明。石垣市四箇村の豊年祭に行われる綱引きについて、綱引きの前に行われる「種子授受の儀礼」とさされてきた「ツナヌミン」は豊穰を祈願する性的模倣行為の演出であり、綱引きは雨乞い祈願であるとする新しい見解を示した。

## 八重山の綱引き儀礼について

―石垣市シカ村の事例を中心にして―

大城 公男

沖縄地方の綱引きは二つの綱の先に設けられた輪を結合して引く。八重山地方も黒島を除き、例外ではない。二つの綱の輪を結合して引く綱引は、綱引きの伝来という時間軸で見れば初期の形態とはいえない。八重山地方では、伝承や史料（『琉球国由来記』『八重山編』）などから推測すると綱引きはかなり古くから伝わっており、綱は一本綱であった。そして、「雨乞い」のために綱を引いていたと思われる。

青柳真智子は、二つの綱の輪を結合して引く地方は散発的で、それが綱引きの原型であったとは思えないという。また小野重朗は、韓国の綱引きが沖縄の綱引きとほとんど同じで、それが大陸のどこかを經由して沖縄に伝えられたのだろうという。そして、琉球国王の支配を受けていた奄美に二

<p>つこの綱を結合して引く習俗がないことか ら、薩摩が沖繩に侵攻した一六〇九年以降 にこの種の綱引きが沖繩に伝えられたのだ らうと推測する。</p> <p>二つの綱は雄と雌とされ、この二つの綱 の結合は明らかに性的行為の模擬的演出で ある。池春相（チ・チュンサン）によれ ば、韓国では綱を引く前に新郎・新婦に扮 した男女の若者が綱の頭部に乗って登場す る。そして池は、その後の綱の結合はこの 二人の男女の性的行為を模擬的に演出する ものだという。私は、綱の頭部に乗って現 れる二人の男女の韓国の習俗が、八重山地 方ではツナヌミン（後述）に変形したと考 えている。人間が乗るほどの大きな綱が作 れなかったという物理的な制約があったの であろう。</p> <p>八重山地方の多くの村ではプール（豊年 祭）に綱引きを行う。プールの祭事は収穫 感謝祭と予祝祭で構成される。収穫感謝祭 は四箇村（以下、シカ村と表記）ではオン プール、鳩間村ではユードウーシ、予祝祭 はシカ村ではムラプール、鳩間村ではトウ ピン・シナピキヌピンと呼ばれる。綱引き は予祝祭の中心的儀礼として行われる。</p> <p>シカ村ではムラプールの日の午後三時ご ろ、各村（登野城・大川・石垣・新川）の 旗頭が真乙婆御嶽前に集結する。続いて境 内では、新川から始まって各村の婦人たち</p>	<p>による巻踊りが奉納される。それがひとと おりすむと、舞台は御嶽前の路上に移る。 大勢の見物人が見守るなか、東と西から 板の台が持ち上げられ、それに乗って二人 の人物が登場する。東は男で黒装束に白頭 巾、長いあご髭を伸ばし、杖を持って立っ ている。明らかに神の演出である。傍らに 二人の若者が従う。他方、西は女で、白い 衣装に紫の鉢巻をし、背中まで垂らしてい る。そして、正座して合掌している。ここ らは巫女である。</p> <p>東西の台が中央まで来ると、東の神は腰 を下ろし、従者の差し出す籠を西の巫女に 渡す。中にはイネ・アワの穂が入ってい る。それが済むと東の神は立ち上がり、二 つの台は元の位置へと運ばれていく。とそ の後へ、大勢の女たちがどつと繰り出し、 踊りだす。まるで何かに取り付かれたよう に踊る。そのうち一人の女が境内に入り、 神前に供えられていた直径一〇センチ、長 さ一メートルほどの棒を頂いて出てくる。 それを取り囲み、女たちはいっそう興奮し て狂ったように踊る。</p> <p>それがしばらく続くと、女たちは道の片 側へ寄ってくる。そこにはその日使われる 大綱が無造作に放置されている。女たちは 力を合わせ、二つの綱の輪と輪を結合す る。その中へ、神前から授けられた件の棒 を差し込む。女たちはまた踊りだす。</p>	<p>ここで展開される現象は、旗頭、巻踊り を含めすべてまとまった予祝儀礼として構 成されている。そのなかで板の台の二人の 人物、神前から授けられた棒、二つの綱の 結合が深く関わり、予祝儀礼の主軸とな る。ところがこれまでこの三者は、板の台 は「種子授受の儀礼」、綱の結合は伝承に より「アヒヤー（婦人）綱」と呼ばれ、引 かない綱引きとして奇異に扱われてきた。 件の棒にいたってはまったく説明されるこ とがない。</p> <p>儀礼をていねいに観察するならば、二つ の綱の結合は性的模擬行為の演出で、神前 から授けられた件の棒は男根の象徴であ る。そして板の台の二人の男女が性的行為 の主体を表し、その行為の前段階の婚姻を 演出する。ここで期待されているのは豊穰 である。行為の結果としての生命の誕生が 作物の豊作と結びつく。</p> <p>人物の組み合わせは、ここでは神と人 で、神人結婚ということになる。現代の感 覚では異様に聞こえるが、古来稀ではな い。八重山地方では年に一度、はるか海の 彼方から神が五穀を船に満載して人々に届 けるといふ信仰がある。その神が東の男に 仕立てられた。つまり、東の神から渡され るイネ・アワの穂は五穀（豊穰）の印で あって、いわれるように種子を意味しな い。</p>
---	---	--

<p>舞台に乗せたという新説も出ている。ツナ</p>	<p>綱引きの前行われる板の舞台と二人の人物のアクションはツナヌミンと呼ばれる。真乙婆御嶽前で行われる神と巫女の舞台は「種子授受の儀礼」と呼ばれてきたが、本質的にツナヌミンである。ツナヌミンは「綱の耳」の意で、本来は綱の輪を指す。あの板の台と人物をツナヌミンと呼ぶのは綱の輪（耳）と同一視しているからである。韓国の綱引きでは綱の頭部に二人の男女が乗って登場するが、ここでは板の台に変わったと見ればよい。</p> <p>真乙婆御嶽前での祭事が終わると、舞台は一五〇メートルほど西の路上、十字路に移る。そこで予祝儀礼のもう一つの儀礼、大綱引きが行われる。ここでも綱を引く前にツナヌミンがある。午後六時半ごろ、東と西で十数本のたいまつが灯され、その中から板の台に乗って二人の武者が現れる。東の武者は長刀を、西の武者は両手に鎌を持っていて。東西の台が中央で合うと両者は丁々発止と戦うが、五、六分で元の位置へと運ばれていく。その後で大綱引きがある。</p>
<p>者）による雨乞いの祈願が一心に行われて</p>	<p>ヌミンと綱引きの関係については、まったく思考が向かないのである。地元では綱引きの研究家として知られるAでさえ、ツナヌミンを大綱引きの前に配した演出は絶妙で、奔流を一瞬せき止め、さらに大きな力となつてほとぼしるエネルギーを湧き出させるために成功している、と述べる。ツナヌミンを大綱引きの前哨戦としか見ないの</p> <p>綱引きの綱が竜を表すということは多くの先学の研究によつて定着している。竜は司水の神である。二つの竜が相争うと雨を降らせると言われ、それを綱引きやハーリーのよう、人間が具象的に演ずるという習俗も伝えられていた（馬淵東一）。綱引きの儀礼的意味は綱の結合という行為に集約される。大綱引きは二つの竜の争いを演出したもので、綱の結合はその争いを象徴する。そして、武者の戦いは竜の争いを具象的に演ずる。したがつて武者を牛若丸と弁慶と見ようが、貴族と農民と見ようが、はたまたガギ棒と見ようが、どちらでもよいのである。</p> <p>大綱引きが行われる十字路の北角から二軒目に屋号マーフタヤと呼ばれる真久田家がある。代々「水の主」という神職を出す家柄である。大綱引きが行われている間、その家ではシカ村の全ツカサ（女性神職者）による雨乞いの祈願が一心に行われて</p>
<p>区別されなければならない。</p>	<p>いた。水の主の神職が消失した現在、雨乞いの祈願は真乙婆御嶽で行われている。これで察せられるように、大綱引きは雨乞いの儀礼として行われているのである。</p> <p>シカ村の事例を見てきた。それでは他の村ではどうか。大浜村では降雨祈願の綱引きはあるが、豊穰祈願の綱引きはない。ここでは海の彼方から訪れる豊穰の神を迎える儀礼が濃密に行われていた。一方白保村では豊穰祈願の綱引きはあるが、降雨祈願の綱引きはない。そこではカツアルバカオを中心に、降雨祈願が一年を通して行われている。また鳩間島では豊穰祈願の綱引きはあるが、降雨祈願の綱引きはない。この島ではハーリーが降雨祈願の儀礼として濃密に行われている。</p> <p>これで、プールの予祝祭事は豊穰祈願と降雨祈願で成り立っていることがわかる。豊穰祈願は性的模擬行為を、降雨祈願は二つの竜の格闘とともに綱引きで演出する。ただ各村の儀礼の演出は、それぞれの古来の信仰形態によつて差異が出てくる。</p> <p>なお会場から、雨乞いは年中どこかで行われていたのではないかという意見が出たが、現実に雨が降らなくて祈願が行われる場合と、予祝祭事としての雨乞い祈願とは区別されなければならない。</p>

文化短信

喜舎場永珣氏収集資史料  
石垣市に寄贈

「八重山研究の父」とされる郷土史家、喜舎場永珣氏（一八八五～一九七二年）が収集した古文書などの史料四六〇件二九二七点が、このほど喜舎場家から石垣市に寄贈され、一〇月一七日に孫の故喜舎場一隆さんの妻幸子さん、一隆さんの弟の木場一壽さんが中山市長に目録を手渡した。  
「喜舎場永珣コレクション」は永珣氏、息子永浩氏、孫の一隆氏が三代にかけて収集したもの。首里王府が八重山に置いた蔵元の文書など、近世の古文書類や歴史・民俗・古謡に関する研究ノート、新聞や論文のスクラップ、写真、書籍など多岐にわたる。木場さんによると、永珣氏は自身が集めた資料を公的機関に寄贈するよう遺言を残していたという。石垣市によるとコレクションは劣化が進んでいるため修復作業を優先し、修復後にコレクションの全容がわかる展示会の開催を検討することのこと。同史料は市立八重山博物館に収蔵される。

新刊紹介

方言学者ならではの視点  
高橋俊三『琉球王国時代の初等教育  
―八重山における漢籍の  
琉球語資料―』

八重山博物館には「二十四孝」「三字經俗解」などの漢籍がある。これは初等教育用の教科書だが、本書はこれらの漢籍が八重山でどのように読まれていたのかを言語学的に研究したものである。  
三章からなり、第一章「琉球王国時代の初等教育」は、教育制度・教材、久米島や八重山での教育の実態について、真境名安興や比嘉春潮、喜舎場永珣などの文書を引いて紹介する。  
第二章「『二十四孝』『三字經俗解』『小学一之巻』の言語」は、それぞれの資料について文体、表記法・音韻、文法など、言語の特徴を述べている。  
第三章は「『二十四孝』『三字經俗解』『小学一之巻』の校注・訳注」で、翻刻と訳文・語注が施されている。  
漢文資料は難解なものとなされがちだが、日本は明治の初期まで、初等教育の基本は漢文素読であった。王国時代の琉球ももち

ろん「小学」から始まり「四書五経」と漢籍を学んだ。だが、それがどのように読まれ、講義されていたのかということについては、これまで言及されたことがない。  
ところが、高橋氏は、漢文教育が琉球方言で行われていたことを、本書で初めて明らかにした。八重山博物館所蔵の漢籍資料を翻刻し、言語学的に調べていくと、それが琉球方言で書かれていることがわかったのである。たとえば「小学巻第一」を説明するのに、「タウ此書物ヲ、小学ンデ、イチャル本ノヨハリハ」と書いている。本書の第二章は品詞の分類や動詞の活用など専門的ではあるが、事例を簡潔に述べているので難解ではない。

本書は方言学の研究者だからこそなした考察であり、琉球方言研究や王国時代の教育史に新たな知見をもたらしたといえよう。高橋俊三氏は一九四二年広島県生まれ。広島大学大学院文学研究科修士課程修了。沖縄国際大学文学部名誉教授。今年五月死去。（A45判、三二二頁、

榕樹書林、定価二八〇円＋税）

次回のお知らせ

★日時・講師はおつてお知らせします。  
今年も残りわずか。  
よいお年をお迎えください。

